

玉椿物語

後編

水上勉



新潮社版



玉椿物語 後編 六五〇円

昭和四十七年十一月三十日印刷
昭和四十七年十二月五日発行

著者 水上勉

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

郵便番号 一六二

東京都新宿区矢来町七一

電話東京(〇三)二二

振替東京八〇八番

(乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。)

「玉椿物語」後編目次

越路の雪	五
孤雁	六六
春の水	一三〇
女二人	一七四
屍の河	二三二
月下の別れ	二六〇

装
画
原
万
千
子

玉
椿
物
語
後
編

越路の雪

夜が明けようとする時刻だった。館の周囲にかがり火が燃え、家臣や軍兵が往来していた。昨夜おそく、佐柿から使者が来た。柏原の兵がいよいよ、国吉城を攻めはじめたという。さらに、越前勢は、奥の坂尻村から、道なき道を越えて、木野村に出、耳川の岸辺に列をなして進んでくるとの報も入った。粟屋の城は堅固なので、関峠の本隊に委し、別隊は三国山系を横断して、一挙に川をわたり、熊谷伝左衛門の気山城、熊谷大膳の井崎城を攻めた。隣の藤井には山県下野守の砦があったが、これも攻撃された。

情報によると、五千という兵は嘘ではなく、耳川をわたる時には二千の人数があった。まんまと朝倉に裏をかかれた。というのは、粟屋勢は、国吉城さえ守っておれば、敵の西進を喰い止められると信じ、関・椿の両峠に鉄砲隊も待機させたのに、関峠は、敵の見せかけで、粟屋を東に釘づけしておいて、ひそかに三国山系へ入り、坂尻村から木野へ出たのだ。気山、井崎、藤井が陥ちれば、小浜はもうすぐである。

武田元明は、直臣の小原帯刀、野田甚太夫、時岡兵助などを集めて、作戦を練っていた。城内の騒ぎは、竜の方の部屋にきこえてこぬわけではない。いま、こころなしやつれを見せた顔を、竜

の方はこうに向けて、

「このような大事な時機に、妊こゝつてしもうたわが身が、憎にくうてなりませぬ」といった。

「なにをおっしゃられます」

こうは、びっくりして、

「お方さまのおことばとも思われませぬ。お身におやどりなされたお子は、お殿さまの子……お殿さまのお子なれば、大事なお子にござりましょう。お世継ぎの子を妊こゝられたのでござりまするから、お殿さまはいわずもがな、家臣ご一同お喜び申しあげておりますのに……そのようなことをおっしゃられては……」

「つつがない平和な日なら、わらわは妊こゝつた身を、人々から喜ばれて嬉うれしくもあろう。だがいまはお屋形様も、一大難儀の前に苦しんでおられます。朝倉勢は、氣山を陥おとしたとききます。このままならば、いつ、城へくるやもしれませぬ。わらわは、身重の身で、お屋形様の荷となるのが心苦しいのじゃ」

「……戦がはじまれば、お方さまも……戰場へ出たいとは……上平寺におられるところからの……氣丈なおことばにござりましたな」

こうは、しずかに説きかすようにいった。

「されど……お方さまは、武田家のお世継ぎをおうみなされる大事なお軀からだになりました。戰場に出てお屋形様をお助けするわけにはゆきませぬ。どのようなことがあっても、お方さまは、お腹の子を大事にお育てにならねばなりませぬのじゃ。それが……お屋形様へのご奉公にござりまするぞ」

「……………」

竜の方は不満そうにこうをみて、

「わらわはそうは思わぬ」

といった。

「わらわは、戦場へ出て……戦う方がよい。……後瀬の城が敵に囲まれば、一兵たりとも、降伏してはならぬ。朝倉とさしちがえて死ぬ覚悟でおれ……とは、お屋形様の昨夜のおことば……わらわも、覚悟はきめております。こうは、何ぞというとお世継ぎを育てねばならぬという……城が陥ちても……わらわは子を生まねばならぬのか……武田の城が陥ちれば、武田の家はそれで、しまいであらう。わらわに子を生ませて……そこもとは、どこかへ逃げようともいのか……こう……わらわは京極の娘じゃ。そのような女々しいことをいたして、天下の笑いものになるのはいやじゃ。わらわは……お屋形様に願ひ出るつもり。戦がはげしくなればわらわも、戦場へ出たいのだ」

「いつまでも……若やいだことを申されます……お方さま……少しも子供のころとちがわれませぬな」

こうは顔にやわらかい微笑をうかべて、

「お方さまは、男のお方ではありませぬ。女の身にあらせられますぞ」

といった。竜は不機嫌に、

「それはわかっておる。女であらうと、戦に出てはならぬという法はあるまい。上平寺にいたころよく、父からきいた。まだ、京極館が山上にあったころ、六角親子が攻めてきた。館は焼かれた。その時、母上は、けなげに、長刀ながたちをもつて、敵と斬りむすばれた……母者は勇敢な人であっ

た……父上は、そうわらわに申された……女といえど、武人の妻は、戦に出る覚悟がなくてはならぬ……それが戦国の女じゃ……父上は、長刀を習うわれらをそう諫められた」

「この城が、危機に迫られた時はたとえ、お身重のお方さまであろうと、戦わねばなりませんまいけれども、まだ、そのような時はきておりませぬ。粟屋殿も国吉へ帰られ、応戦なされております。氣山の城が陥ちても、国吉が陥ちねば、敵ははさみ討ちになりましょう。井崎の熊谷大膳殿も、瓜生の松宮玄蕃殿も、強いお方。西の本郷、佐分利、加斗より急援も到着しております……お方さまのお案じられますように、かんたんに敵は攻め入ってなぞこれませぬ。ごらんなさりませ。お城の下は、お殿様を助けようと、はせ集まった兵ども二千が……待機しております。ご領主さまのお身を案じるからこそその兵にござります。ご領主様の身を守ることは、お方さまのお腹にやどりなされたお世継ぎを守ることもござりませぬか……お方さまは、お部屋にこもられて、しずかに……お休みなされませ」

「わらわに……部屋にとじこもって……臥せておれと……こうはいうのか」

「左様にございます」

「……わらわは、お屋形様のお手助けをしたいのじゃ」

「おっしゃられても、それは足手まといじゃと……お屋形様はお叱りになりましょう」

こうはそういった。竜の方は溜息をついて、恨めしそうにこうをにらんだ。

竜の方に、ご懐妊の兆があったのは、十日ほど前のことで、月々順調にめぐってきたさわりがとまってわかったのだが、竜の方は、そのことをすぐに元明に漏らさなかった。足利義秋の入国やなにかで、城内があわたしなかったからである。だが、九月に入ってそれが元明に報ぜられると、元明はじめ家臣たちも喜んだ。お世継ぎの生誕につながるからであった。元明は、竜に、

「そこもとに子が出来る……父上の霊にさっそく申しつたえて喜んでもらおうぞ」といった。

「父上は孫の顔がみたいと……あれほど申されておった……いや、父上だけではない……わしも嬉しい……武田に世継ぎの子が出来るのじゃ」

元明は、子供のように、頬を染めてよろこんだ。

「お世継ぎと申されましたも、いまだ、男の子が生まれまするやら女の子になりまするやら、わかりませぬものを……そのように」

と竜の方は羞じらいを顔にうかべ、

「お屋形様には、多事多難の折に……竜が身重では、お気づかいにもなれましょう。いまは、お屋形様の手足となつて、働かねばなりません時……心苦しい氣持がいたします」

といった。

「馬鹿を申せ……」

元明はにっこりして、

「多事多難であつても、そこもとに表へ出てもらうこともあるまい。竜……そこもとは、城におつて……健やかな子を生んでくれ。よけいなことを考えぬがよい」

こうもまた、この元明と同じ考えである。朝倉軍が、後瀬城に迫つても、城はそうたやすく陥ちるわけではない。家臣は諸谷から集まつて固めている。城内に、お世継ぎを妊られたお方さまがおられてこそ、勇気も百倍するというものであった。そのことを、こうは竜の方に説いてきかせるのだが、竜の方は、戦の足手まといになるのが心苦しい、妊った身をうとましいという。

「そのようなことが、上平寺のお父上にきこえてごらんなさりませ……お父上はどのように、お

驚きになりましょう。お方さまは、ひたすらお心を休めて……お氣を外に散らさぬよう……すこやかなお子をお生みになることが肝要でござりまするぞ」

ところはいった。

「こう」

竜の方は語氣をかえて、

「鬼平太は、無事、金ヶ崎の公方様にお会いできたであらうかの」と訊いた。

「木瀬さまも、鬼平太さまからの報告を心待ちされております。が、音沙汰はありません。さぞかし、越前路は、難儀なのでござりましょう」

ところはいった。

「いずれにしましても、鬼平太さまのこと故、かならず、公方様のご返書をもって帰られるでしょう。いま、しばらく、お待ちになることです」

「わらわは……美祢のことが……気にかかるのじゃ……あの娘も……いまは敵中へやってみようたような気がする。公方様のお側におれば、無事であろうとは思いますが……いかがいたしておるかとやら……」

竜の方は、眉をくもらせて、こうをみた。こうもそのようにいわれれば、美祢のことが氣にかかる。

「ご案じなさいますお氣持も、よくわかります……けれども、美祢は氣丈夫な女にござりまする故……きつと……公方様のお側に元氣でかしずいておることと思います」

「左様であってくればよいがのう……」

「美祢は……金ヶ崎のお城に……玉椿の苗を……植えておったとお屋形様のお話にござりました。後瀬のことは、わすれずに……気丈に働いておることと存じます」

「鬼平太が帰ってくれば、そのこともわかるであらう……鬼平太はいかがいたしておるのであらう……わらわには、心配でならぬのじゃ」

「佐柿の城を朝倉軍が攻めております。きつと、表街道は通れませぬ故に……帰城がおそいのでござりましょう。ご心配には及びませぬ。あのお方は不死身のお方。元氣でおもどりになります。おもどりになれば、美祢や、公方様のご消息がきけます。いましばらくお心を休めて待たれることとございます」

こうは、心の中に重く固まりつつある越前の雲行きを不安に思いながらも、竜の方に、けぶりにもみせない顔でいうのであった。

「さあ、奥にてお休みあそばしませ。庭には、もう、高い土塁も積まれ……城固めがすみましてござります。諸谷から集まられた家臣の方が、元氣に、お屋形様をお守りなされております」

「わらわは……つくづくと戦がいやになった……」

竜の方は、この笑顔をにらみつけていた。

「わらわは、戦がきらいじゃ。上平寺の父上は……お屋形様一大事の時は、女であろうと、長刀をもって戦わねばならぬと諫められたが……戦はおきらいなお方であったのう……そのお氣持が、子を妊みてみてわかるような氣もする……こう、わらわは、観音寺の城の六角親子が、霧ヶ峰城を焼き亡ぼした時の……恐ろしさをわすれてはおらぬのじゃ……こうも……おぼえておろう」

「……」

「わらわは、本当に戦はきらいじゃ。人を殺し、家を焼いてまで権力をほしがる人の心がおそろ

しい。こう……わらわは、これを臆病な気持からいうておるのではないぞ。わらわは……小さい時から、戦に会うてきたが故に……戦の恐ろしさを嫌うておるのじゃ。お屋形様とて……戦が好きなお方ではない。そのお屋形様の、戦にまきこまれねばならぬお立場が……いまわらわによくわかるが故に……家臣の……修羅の顔もみとうはない。こう、朝倉が、なぜ、後瀬を攻めるのか。何の理由があつて、この国を攻めるのか……そのことを、こうは考えたことがあるのか」

「……」
こうは、急な竜の方の激しい口ぶりに、顔をひきしめた。

「朝倉は……若狭の領土が欲しいのじゃ。ただ、それだけのことじゃ……国が欲しゅうて人を殺しにやつてきたのじゃ」

北田ヶ浜へさしかかる柚道を、鬼平太は、ぎんをつれて歩いている。月は出ていない。空も地面もうるし壺へ入ったような暗さである。

「強情な女だ……わしについてくると命が危ない……あれほどうたのに、どうして尾いてくるのか。北田へつけば、弥伍たちもおる。そこで別れよう。わしといっしょに後瀬へ来たつて……お前の仇とねらう半田又八がおるわけでもない。又八は金ヶ崎にいる……」

「戦がはじまれば、又八は、金ヶ崎から、若狭にくるにちがいない。うらは、後瀬城にいて、待ちたいのじゃ」

とぎんはいった。

「それはいかぬ。わしは忍びの者ゆえ、後瀬へ入れるが、お前さんはゆるされぬ。お前さんは、半太夫殿の下で働いた方がよいのだ」

「……舟に乗るときは、うらのいうことなら何なりときくというたではないか」

「それは、ぎんの、兄者を殺された恨みがよくわかったからじゃ。ぎんが又八を討ちたいと思う気持はよくわかる。だが、いま、わしには、時機ではない。何ともいうように、わしには、後瀬のお方さまを、守らねばならぬ任務がある」

「後瀬のお方さまは……うらやましいお方じゃ」

とぎんは、うらめしげにいった。

「鬼平太さんにそれほど思われて……しあわせなお方じゃ」

「馬鹿をいうではない。お方さまは、お屋形様の妻であらせられるのだぞ」

「奥方さまはよくわかっておるわ。……じゃが、鬼平太さまの……奥方さまのことをいわれる時の声はふるえておる……」

「わしはただ、上平寺の殿様の命令にしたがっているだけじゃ。ぎん……忍びの者には、殿の命に服して働く道のみがあって、自分の欲を遂げる道はない……つまらぬ役所^{やくどころ}じゃ。わしが、いま一介の浮浪人だったら、ぎんのいうことをきいて、又八の首を、いっしょに討ちとってやつてもよい。それが……ならぬ。残念じゃ」

「うまいことをいうのう。うらは鬼平太さんこうして、名子の浜から、いっしょに歩いた夜のこととは一生わすれんぞ……あんたというつめたい男を一生わすれはせん……」

「つめとうなどはしておらぬ……わしは、自分の任務をいそいでいるのだ……さあ、浜がみえてきた……かがり火がいっぱい燃えておるわ。北田殿の屋敷じゃ。今ごろは女たちの炊き出しは忙しいじゃろう。お前さんも……城へ入って働くがよい……」

「……」

ぎんは残念そうに舌打ちする。鬼平太は急に、この女への愛着をおぼえる。不思議である。金ヶ崎から名子に着いた時、別れがたい何ものかにひかされて、ぎんをつれて山へ入った。ぎんは後瀬へゆきたいという。やがて攻めてくるであろう半田又八の首をうちとりたいという。鬼平太は困った。半田をうちとりたいならば、金ヶ崎へゆけばよい。今頃、手うすな城で、のんびりしているだろう。しかし、そのことを、鬼平太はぎんにいわないのだ。

一つは、これから後瀬へ帰って元明の処断を仰がねばならない。もし、元明の腹が、朝倉拳兵に對抗ときまれば、又八をねらうことも可能だろう。だが、いまその時機ではない。

鬼平太は、世話になったぎんを北田の城へおくり届けて、織田ヶ浜から佐柿へ出て、後瀬へ走ろうと思う。

「わしも、お前さんのことはわすれはせんぞ」と鬼平太はいった。

「名子の浜から、金ヶ崎まで、あんなに早く舟を漕いでくれたお前さんの……女とも思えぬ力に感心したし、それに、お前さんは、これまで、わしがみたどの女よりもたくましい。また、それに……お前さんは美しい」

「うらが美しい……うらを嫌うて、北田へやりたいために、そんなことをいう……」

ぎんはすねた物言いになった。鬼平太は、いま、暗がりの中で、足をとめて、ぎんを思いきりつよく抱いてやりたかった。

孤児のぎんは、自分と同じ凍えた軀をもっている。そうして、その凍えた軀の芯に、チロリと燃えた人恋しい気持をもてあまして、いま、声をうわずらせて、後瀬までゆきたいという。けなげな気持はわかる。だが、それでは足手まといだ。こんなことを、吉兵衛が知れば、きつとわら